

千葉市感染症発生動向調査情報

2013年 第21週 (5/20-5/26) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		21週	20週	19週	18週
上段:患者数 下段:定点当たりの患者数	小児科	18	17	18	12
	眼科	4	5	4	2
	インフルエンザ*	27	27	28	21
	基幹定点	1	1	1	1

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

定 点	感 染 症 名	千 葉 市					千葉県
		注意報	5/20-5/26	5/13-5/19	5/6-5/12	4/29-5/5	5/13-5/19
			21週	20週	19週	18週	20週
小児科	RSウイルス感染症		0	0	1	0	7
			0.00	0.00	0.06	0.00	0.05
	咽頭結膜熱		2	2	2	0	46
			0.11	0.12	0.11	0.00	0.35
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		35	58	56	17	375
			1.94	3.41	3.11	1.42	2.84
	感染性胃腸炎	○	168	146	128	47	1,035
			9.33	8.59	7.11	3.92	7.84
	水痘		14	17	23	5	150
			0.78	1.00	1.28	0.42	1.14
	手足口病		4	0	1	0	24
			0.22	0.00	0.06	0.00	0.18
インフル	伝染性紅斑		0	0	1	1	14
			0.00	0.00	0.06	0.08	0.11
	突発性発しん		13	22	14	4	86
			0.72	1.29	0.78	0.33	0.65
	百日咳		0	0	1	0	2
			0.00	0.00	0.06	0.00	0.02
	ヘルパンギーナ		3	0	0	0	6
			0.17	0.00	0.00	0.00	0.05
	流行性耳下腺炎		3	1	4	2	31
			0.17	0.06	0.22	0.17	0.23
	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		21	13	11	32	122
			0.78	0.48	0.39	1.52	0.58
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
基幹定点	流行性角結膜炎		1	2	1	1	40
			0.25	0.40	0.25	0.50	1.18
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	1
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.11
	無菌性髄膜炎		0	0	0	0	1
基幹定点			0.00	0.00	0.00	0.00	0.11
	マイコプラズマ肺炎		0	0	0	0	3
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.33
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(20件)

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	20歳代	病原体等の検出	後天性免疫不全症候群	男性	40歳代	病原体遺伝子の検出
結核	男性	20歳代	IGRA検査等	風しん	男性	20歳代	病原体遺伝子の検出
結核	男性	40歳代	病原体の検出	風しん	男性	30歳代	病原体遺伝子の検出
結核	男性	50歳代	病原体等の検出	風しん	男性	30歳代	病原体遺伝子の検出
結核	女性	20歳代	病原体の検出	風しん	男性	40歳代	血清IgM抗体の検出
結核	女性	30歳代	IGRA検査	風しん	男性	40歳代	血清IgM抗体の検出等
結核	女性	30歳代	IGRA検査等	風しん	男性	50歳代	病原体遺伝子の検出
レジオネラ症	男性	70歳代	病原体抗原の検出	風しん	男性	50歳代	病原体遺伝子の検出
アメーバ赤痢	男性	40歳代	病原体の検出	風しん	女性	10歳代	病原体遺伝子の検出等
後天性免疫不全症候群	男性	20歳代	病原体遺伝子の検出	風しん	女性	20歳代	病原体遺伝子の検出

・結核7件(85)、レジオネラ症1件(2)、アメーバ赤痢1件(4)、後天性免疫不全症候群2件(5)、風しん9件(148)の報告があった。

()内は2013年累積件数

※ 累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第21週のコメント

＜感染性胃腸炎＞前週より増加し9.33となった。過去10年の同時期と比べると最多。

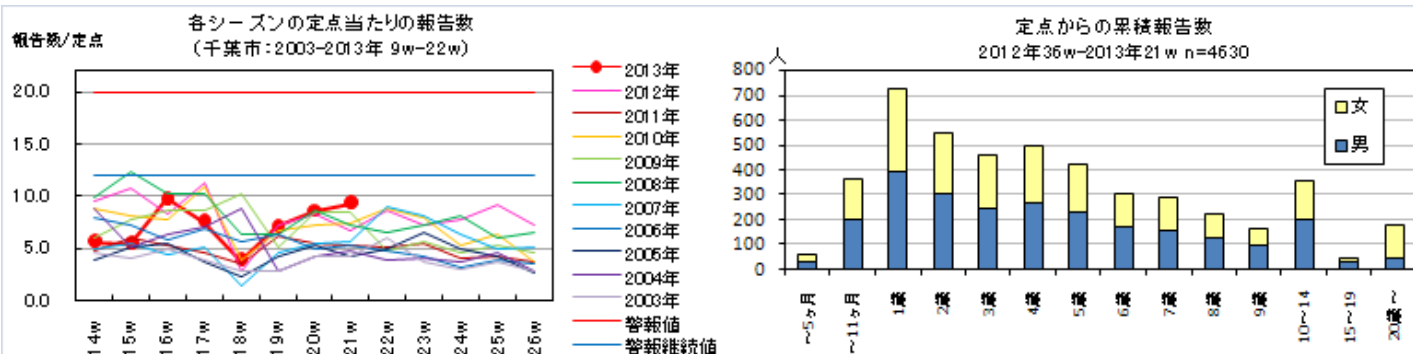
トピック

< 感染性胃腸炎 >

2013年の全国レベル第20週現在は、過去6年間の同時期と多くなっています。都道府県別では、大分県、新潟県、山形県の順で発生が多く見られます。千葉県は全国レベルよりやや少なめとなっています。千葉市では、第21週は前週より増加し9.44となり過去10年の同時期と比較すると最多となりました。区別の発生状況は、中央区で依然として流行発生警報基準値(20.0/定点)を上回って最多となっており、同区の5歳で最も多く発生しています。

感染性胃腸炎の原因はサルモネラなどの細菌によるもの、ノロウイルスやロタウイルスなどのウイルスによるもの、クリプトスポリジウムや赤痢アメーバなどの原虫によるものがありますが、冬期の感染性胃腸炎の多くはウイルスによるものです。ウイルスによる流行期は12月頃から3月にかけてであり、例年では年末にノロウイルスによる大きなピークを形成し、早春にはロタウイルスによる流行がみられます。

感染者の糞便や吐物には大量のウイルスが排泄され、またウイルスが乾燥して空中に漂い経口感染することもあるの、汚物や便は乾燥しないうちに処理しましょう。汚物が付着した床等は、手袋を使用し、次亜塩素酸ナトリウム液(塩素濃度約0.1%)で浸すように拭き取り、使用したペーパータオル等はビニール袋などに密封して廃棄しましょう。



< 風しん >

全国で風しん発生報告数が増加しており、それに伴い先天性風しん症候群の発生も増加し、平成16年の10例に次ぐ5例となっています。第20週の全国レベルの累積発生数は7540と過去5年の同時期と比べて約40倍~200倍と非常に多くなっています。また先天性風しん症候群の届出は5例となり、平成24年と並びました。都道府県別では、東京都、大阪府、神奈川県に多く、千葉県は5番目に多くなっています。千葉市でも同様に持続的に増加しており、第21週現在の累積報告数は148件となり、平成24年一年間の発生数19件に対し、すでに8倍近くとなっています。年齢構成は、5歳代で区切ると10歳代後半から40歳代前半までが多く、特に40歳代前半が全体の22.7%を占め最も多くなっています。全体の80.4%が男性となっています。

風しんや先天性風しん症候群の増加傾向は数年持続することが知られています。

先天性風しん症候群とは、免疫のない女性が妊娠初期に風しんにかかることによって、風しんウイルスが胎児に感染して、出生児に起こる障害のことで、主に先天性心疾患、難聴、白内障があり、それ自体の治療法はありません。予防が重要となります。

先天性風しん症候群の発生予防のため、風しんの定期予防接種対象者(1歳、5歳以上7歳未満)は必ず受けるようにしてください。また、妊婦への感染を抑制するため、成人の方や妊婦の同居家族の方は予防接種を受けることを是非検討して下さるようお願いします。

